

- 新潟県は大豆「エンレイ」の主産地であるが、近年、収量・品質の低下が問題化しており、難裂莢性など機械収穫適性に優れる大豆「**里のほほえみ**」の導入による**収量・品質の高位安定化**が求められていた。
- そこで、普及指導センターを含む関係機関が連携して、**栽培・加工マニュアル作成し、生産者から実需者まで広く情報を提供**し普及を図った。
- その結果、「里のほほえみ」の作付比率は拡大し、平成30年には「エンレイ」を超え約6割(約3,000ha)まで導入が進む見込み。

具体的な成果

普及指導員の活動

1 「里のほほえみ」の円滑な導入

■実証ほや研修会を通じて、生産者や関係機関の認知度を向上。

(H25→H29)

①里のほほえみ作付比率

0.9% → **24.7%**

②10a大豆収量

144kg/10a(全国16位)

→ **179kg/10a(全国3位)**

③品質(1・2等級比率)

8% → **34%**

2 栽培・加工マニュアルの作成・配布

■「里のほほえみ」栽培・加工マニュアルを作成(H29)し、生産者・関係機関等へ提供。(1,500部)



平成27年度～平成28年度

■円滑な普及を図るため、実証ほを設置し、**生育特性、栽培管理上の課題を研修会等を通して情報提供**。(県内主産地9か所)



■先進地視察により「里のほほえみ」の円滑な導入手法や栽培方法、実需との連携等について情報収集。

■収量・品質の高位安定化を図るため、**地域に応じた栽培マニュアルの作成と技術指導**を実施。

■「里のほほえみ」に適した豆腐、味噌等の加工方法を検討し、**実需者との情報共有により利用を促進**。

■関係機関による連携会議や**産地と実需者を含めた意見交換会**を実施し、コンソーシアム形成に必要な情報を収集し連携を強化。

普及指導員だからできたこと

研究や行政、産地の関係機関と連携体制を構築することで、**新品種導入を提案し、的確な実証ほの運営と地域に適した栽培方法を定着させる**ことができた。

3 加工特性の把握

■「里のほほえみ」に適した豆腐、味噌、納豆等の加工方法を検討し、実需者への情報提供と栽培・加工マニュアルに反映。

新潟県

大豆「里のほほえみ」の早期導入に向けた取り組み

活動期間：平成 27～継続中

1. 取組の背景

新潟県の大豆主力品種は「エンレイ」であり、実需者より加工適性の高さ
と安定取引されるロットの大きな品種として評価を得てきた。

その一方で、「エンレイ」は莢がはじけやすく、着莢位置も低いなどコン
バイン収穫に適した品種とは言えず、収穫時の脱粒損失や地際の刈残しとい
った収穫ロスが収量低下の一要因となっていた。また、「エンレイ」はしわ
粒の発生が多く、北陸地域など「エンレイ」主産地では、品質低下が問題と
なっていた。

近年、難裂莢性など機械収穫適性の高い大豆「里のほほえみ」が、近隣県
の大豆産地で導入され、生産性の向上が図られつつある。

そこで、産地ブランド発掘事業（平成 27～28 年）を活用して、「里のほほ
えみ」の本県における品種適応性の確認と早期導入について、重点プロジェ
クト活動に位置付けて取組を行った。

2. 活動内容（詳細）

「里のほほえみ」が県内全域へ円滑かつ速やかに導入されるよう、農業革
新支援担当や普及指導センター等関係機関が連携しながら、実証ほの技術指
導と情報共有、栽培・加工マニュアルの作成、産地と実需者とのマッチング
等の活動に取り組んだ。

(1) 実証ほの設置と現地指導

生産者等へ「里のほほえみ」の認知度向上と普及拡大を図るため、県内の
大豆主産地 9 か所に実証ほを 2 年継続して設置した。

実証ほでの栽培指導、生育・収量調査は普及指導センターが実施し、現地
研修会の開催などで、産地の生産者や JA に対して「里のほほえみ」の普及に
向けた理解促進を図った。また、産地における新品種導入への課題や留意点
について意見を収集し、栽培マニュアルに反映させた。

(2) 県産大豆使用実需者への理解促進、加工適性試験結果の提供

県内での「里のほほえみ」導入に向けた理解促進を図るため、大豆生産に
関わる関係機関の担当者（行政担当課、農業革新支援担当、試験研究機関、
JA）と、県産大豆を利用している県内実需者で、生産拡大に向けた意見交換
を行った。また、産地と実需者のマッチングを図るため、関係機関と連携し
ながら新品種導入推進研修会を開催し、実需と生産の両者間の相互理解を深
めた。

(3) 「里のほほえみ」の導入先進地視察・調査

「里のほほえみ」の栽培が拡大している福井県と栃木県への視察研修を実
施し、新品種導入の取組、肥培管理、防除体系、加工特性や需給動向等につ
いて情報を収集した。また、既に「里のほほえみ」の製造試験を実施してい

る全国規模の大手大豆食品製造業者に対して加工に関する品種特性と評価、新潟県産大豆の需要動向について確認した。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 現地実証の成果

「里のほほえみ」の収穫ロスは「エンレイ」に比べて10a当たり24.7kg少なく、10a当たり実収（製品収量）は229kgで「エンレイ」対比125%となった（図1、図2）。「里のほほえみ」の検査等級は上位等級比率（1～2等）が「エンレイ」より32ポイント高く、高品質安定生産が現地ほ場で実証された（図3）。

実証生産者からは、着莢位置が高く収穫しやすいこと、収量や品質が高いことが評価され、周辺の大豆生産者にも熟期や生育特性などの周知が進む等波及効果が見られた。

(2) 栽培・加工マニュアルの作成と情報提供

平成29年3月に加工特性を含めた「里のほほえみ」栽培・加工マニュアルを作成し、生産者には生育特性や栽培上の留意点について、実需者には子実成分や豆腐、味噌、納豆の加工適性について情報提供した（図4）。

県内実需者においては、これまで長く使ってきた「エンレイ」に加えて、「里のほほえみ」を原料とした試作品の製造や鑑評会への出品などの取組が始まっている。

(3) 品種の早期導入と作付拡大

「里のほほえみ」は平成28年に県の奨励品種に指定され、県内採種ほで種子生産が開始された。作付面積は、平成25年は47haにとどまったが、平成29年には本県作付面積の25%を占める約1200haまで拡大し、平成30年には約6割となる3,000haが見込まれている。

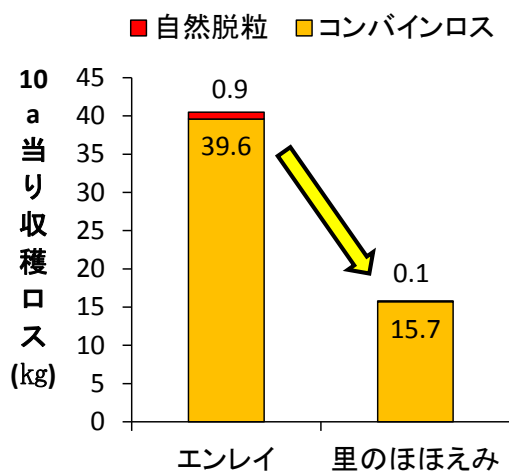


図1 品種と収穫ロスの関係
県内現地実証ほ9か所の平成27-28年平均

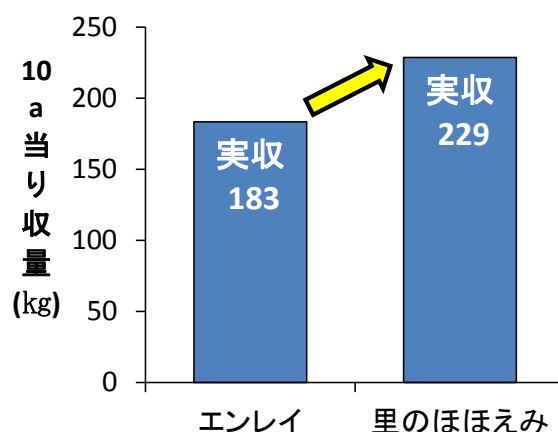


図2 10a当り実収量の違い
県内現地実証ほ9か所の平成27-28年平均

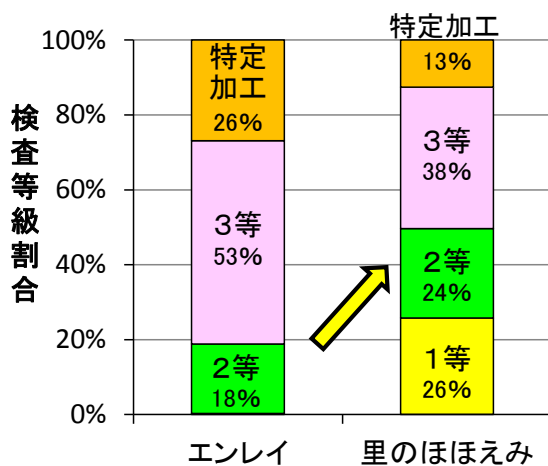


図3 検査等級の向上
県内現地実証ほ9か所の平成27-28年平均



図4 栽培加工マニュアル
(平成29年3月作成)

4. 農家等からの評価・コメント

(農事組合法人ホクシン 代表理事組合長 川崎一敏氏)

「里のほほえみ」を導入することで、品種特性による増収や品質向上だけでなく、「エンレイ」との作期分散を図られた。品種の組み合わせにより「エンレイ」についても収穫遅れがなくなり、減収や品質低下の防止、機械の有効活用が可能となった。

この結果、大豆の経営全体で増収や品質向上効果が認められ、第45回全国豆類経営改善共助会で農林水産大臣賞を受賞することが出来た。

5. 普及指導員のコメント

(経営普及課 農業革新支援担当 主査 服部 誠)

栽培マニュアルに則した栽培方法の実践を進め、「エンレイ」より高い収量と上位等級を安定的に確保し、本県産大豆の評価を高め、需要の拡大とともに農業者の所得確保につなげたい。

6. 現状・今後の展開等

本県において大豆は水田フル活用を図るための重要品目であり、高い収量と品質が期待できる「里のほほえみ」の生産拡大を継続して推進する。さらに、実需者に対しても「里のほほえみ」の浸透を図り、引き続き、加工適性評価を得ていく。